

アミーゴ会だより

2013年 10月
通巻第16号
季刊 2013-III



発行人：上原尚剛
編集人：河嶋正之
 鴻巣勝明
事務局：笠井道彦

メキシコ・日本アミーゴ会とのホームステイ交流プログラム

日本メキシコ学院（リセオ）
文化センター部長 井上真由美

去る6月29日から7月1日までの期間、約1か月の研修で日本に滞在した本校高校生22名を2泊3日の滞在で11家庭の方々に受け入れをしていただき、ホストファミリーの方々と交流をさせていただきました。今年から日本到着直後に実施された最初の活動だったこともあり、生徒達は少し緊張した面持ちでホストファミリーと対面しました。しかし、ホストファミリーと対面し、温かく迎えてくれたことで緊張は安堵に変わり、心づくしのおもてなしを受けた感謝の気持ちと良い思い出を胸に終えることができたようです。後半で生徒達の感想をご紹介します。

本校が高校生向けに実施しております「日本文化交流旅行」の実施目的は、日頃学習している日本語や日本文化についてさらに知識を深め、学んだことを実践する機会を与える目的で実施しております。また、本校の建学の精神にも謳われている“日本とメキシコの架け橋となる人材育成”をするための一助となる、大切な教育活動の一つとしても位置付けております。

この研修旅行では、日本の人々の暮らしや同年代の若者の生活スタイルを知るためのホームステイおよび日本の学校生活を知る体験入学プログラムと、参加生徒全員で史跡や観光地を見学する研修旅行の2つの内容が、旅行の前半と後半に分けて組まれております。



貴会とのホームステイプログラムの他に、体験入学期間中にもホームステイを実施しております。ホストファミリーの中には交流が深まり、メキシコを訪れて再会を果たしたり、お世話になった生徒がまた日本に行ってホストファミリーと再会したりという交流が続いている場合もあります。また、本校に海外留学生奨学制度枠1名をいただいている愛知県名古屋市の南山大学に現在4名の卒業生が奨学生として行っておりますが、そのうちの日系2世1名を除いた3名は、この旅行に参加して日本へ行くことを決めたメキシコ人生徒達で、この研修旅行に参加して出会った人々や、数々の体験がその後の生徒達の将来に大きく影響していることは間違いありません。

このようなことから、この研修旅行は多くの方々のご厚意があり、また出会いを通して得られるかけがえのないものがあるからこそ、観光旅行とは全く違う体験を生徒達に与えてくれると確信しております。

この場をお借りし、改めましてこのような機会を本校生徒達に与えてくださることに心より感謝申し上げます。

= 目次 =

1. 「アミーゴ会とのホームステイ交流プログラム」 リセオ文化センター部長 井上真由美 ... 1
2. 「リセオ高校生のホームステイ：御宿町滞在報告」 会員／御宿アミーゴ会事務局長 土屋武彌 ... 2
3. 私とメキシコ：「2013年メキシコあれこれ」 会員 櫻田 和子 ... 4
4. メキシコへの誘い：「レフォルマに並ぶ歴史 その1」 メキシコ観光(メキシコ) 山内／酒井 ... 5
5. メキシコへの誘い：「2012年メキシコ周遊“ブス”旅行 その3」 海外旅行作家 京免宣昭... 7～17
6. お知らせ：「総会・懇親会 11月7日(木)18:00～22:30」／あとがき ... 3

続きまして参加した生徒達の感想を一部ですが、紹介させていただきたいと思います。

ナオキ・ケンジ・ゲレロ

この最初の鎌倉でのホームステイはとても楽しく、短かったけれど滞在を満喫することができました。外国の初めて会うホストファミリーの家に滞在するホームステイ体験は、他の旅行では体験できない有意義なものだと思います。

パウリーナ・ベガ

このホームステイは、日本について家庭を通して習慣、生活、言葉の表現の仕方や、人々の好みについて知ることができる有意義で重要な体験となりました。学校で勉強したことと日本語は、コミュニケーションを図るのに役立ちましたし、実際の場面で日本語を使うことで更に学べたことが沢山ありました。新たな日本語表現も学ぶことができ、実際にホストファミリーとの会話の中で使ってみることができたことは良かったです。ホストファミリーは大変良くしてくれましたし、彼らから多くのことを学びました。また、私達についても知ってもらえたと思います。

ミドリ・シンジ・ペレス

私のホストファミリーは、メキシコがとても素敵な国で、チレ（トウガラシ）が気に入ったこと、アカプルコのビーチは最高だったことやメキシコシティに約10年住まっていたこと等、



メキシコに滞在していた時のことを話してくれました。滞在中、彼らから日本の文化について沢山のことを学べたことに感謝の気持ちでいっぱいです。また、いただいた食事がとてもおいしくて感激しました。



マリア・スサナ・ポンセ・ナバコルテス

日本に到着した日に御宿町役場を訪問し町長にお会いしました。そこで御宿町がメキシコのテカマチャルコ市との姉妹提携を結ぶことや、アカプルコと姉妹都市提携を結んでいること等を説明してくださいました。町役場を訪問した後、海沿いにあるメキシコとの友好記念の塔がある場所へ連れて行ってくれました。本当にこの初めてのホームステイはとても良かったです！ホストファミリーの方は私達が自分の家にいるようなくつろいだ雰囲気を作ってくれ、お父さんはまた日本に来る機会があれば、いつでもおいでとってくださいました。是非また御宿町に行って土屋さんご夫妻にお会いしたいです。短い間でしたが、とっても素晴らしい滞在でした。

アヤ・アンドレア・カスガ・アカチ

外国の方々に出会い、その方々が私達の国のことに興味を持ってくれることがうれしかったです。また、彼らから異文化である日本の文化について学ぶことができ、日本語も更に上達することができました。やっぱり、外国語を学ぶには実際にその国に滞在して練習することが大切だと思いました。

(了)



リセオ高校生のホームステイ：御宿町滞在報告(抜粋)

会員（御宿アミーゴ会 幹事・事務局長） 土屋武彌

このたび御宿アミーゴ会はメキシコ・日本アミーゴ会の要請により、メキシコから来日した高校生5人のホームステイ受入れ協力を行った。この事業は日本メキシコ学院（日墨学院：リセオ）とメキシコ・日本アミーゴ会の間で「日本文化旅行」の一環として毎年実施されてきたが、日本とメキシコの交流発祥地の御宿には初めてのホームステイであった。

日本とメキシコの交流は1609年9月30日未明に突然起こった。フィリピン前臨時総督のドン・ロドリゴが任務を終えてマニラからヌエバエスパーニャ（現在のメキシコ）に向かう途中、373人が乗船したスペイン（メキシコは当時スペインの植民地）の大型ガレオン船サンフランシスコ号が上総国岩和田沖で台風に遭

遇し座礁・沈没した。岩和田尻海岸に漂着した317人を献身的に救出したのが、わずか300人ばかりの寒村、岩和田村の村民たちであった。

この事件は日本の最大権力者の徳川家康に伝えられ、家康はドン・ロドリゴを引見、厚遇した。翌年1610年8月1日、日本で建造されたサンブエナベンツラ号により浦賀を出帆、同年11月13日にアカプルコに安着した。以来400年を超えて両国の間には友好の絆が辿がれてきた。この間に不幸にして関係が途切れた時代もあったが、それを補って余りある新しい交流が作られようとしている。

未来に向けた新しい主役が両国の若人たちである。今回来町した日墨学院の高校生には、先人たちが築

いてきた史実、特にこの嚆矢となった御宿町を見聞し理解していただければと願う。

第1日：6月29日(土)

15:20 特急わかしお13号で生徒5人が御宿駅に降り立つ。引率は井上真由美先生(日墨学院文化センター部長)と笠井道彦さん(メキシコ・日本アミーゴ会事務局長)。駅頭で土屋武彌(御宿アミーゴ会幹事・事務局長)とガブレイラ・ビダーニャ(会員・通訳)に引き継ぐ。

15:40 石田義廣・御宿町長を表敬訪問。町長は歓迎の挨拶後、生徒たちと懇談。貝塚嘉軼・御宿アミーゴ会代表幹事同席。移動には町有車が提供された。

16:20 童謡「月の沙漠」に因む記念館を訪問。メキシコを題材とする作品が多々展示中の「千葉二科会7人展」を鑑賞。大隈武夫画伯(二科会理事)の説明を受ける。

16:50 ドン・ロドリゴの御宿「縁の地」を見学。
①「日西墨三国交通発祥記念碑」(通称「メキシコ塔」)。岩和田の太平洋を望む岬の突端に1928年10月1日建立。一帯は「メキシコ公園」として整備。1978年11月1日、ポルティエリョ大統領来園。②日墨交流400周年記念彫刻「抱擁」。メキシコ政府より2009年9月26日寄贈された故ラファエル・ゲレロ氏の作品。③ドン・ロドリゴ一行の漂着地・岩和田の田尻海岸。生徒たちは縄を伝い、田尻海岸に降り立つ。④大宮神社(大宮寺)。ドン・ロドリゴ一行が家康の沙汰が下りるまでの37日間逗留。⑤御宿浅間神社の貢礼祭。古くから伝わる夏の風物行事。井上信幸宮司から御神酒が振る舞われ、生徒たちの旅行の安全を祈願。

19:00 ホストファミリーの土屋宅に投宿。全員で夕食をとり、会話に興ずる。夕食後、自発的に後片付けをしてくれる。順番に入浴後、就寝。

第2日：6月30日(日)

09:00 朝食後、町有車にて土屋宅を出発。通訳のガブレイラさんも同行。

09:30 メキシコ花園で皇帝ダリアを植栽。石田町長と皇帝ヒマワリ交流会の安藤操会長も参加。朝日、毎日、千葉日報の取材を受け、各紙に記事掲載。



10:10 夷隅市の「ロドリゴ駅伝ロード」。テカマチャルコ市長杯争奪駅伝で、メキシコチームも参加。

10:30 大多喜城(県立中央博物館分館)。高橋覚・上席研究員より史実と展示品の説明を受け、博物館の好意により、研修館で江戸武将の甲冑を試着。生徒たちは10kg超の重さに驚く。

12:30 ランチは大多喜城下のそば処で韃靼そばの天ざるを味わう。箸使いに時間を要するも、そば湯を飲み干して全員完食。

13:40 天台宗名刹の行元寺。849年慈覚大師開山の学問寺。同寺の好意により本堂内で説明を受ける。通訳はガブレイラさん。

15:00 御宿アミーゴ会員内山浩さんの土産品店にてしばし寛ぐ。御宿国際交流協会などからのプレゼントをゲット。

15:50 御宿海岸の名所「ラクダの像」。待望の白浜つづくプラヤに遊ぶ。

18:00 土屋宅に帰着、宿泊。暑さと強行日程にも皆元気。夕食の手巻き寿司を楽しむ。前夜に増して会話が弾み、備え付けのPCで各々メール交信。

第3日：7月1日(月)

07:40 朝食後、ホストの土屋宅を町有車で出発。

08:13 特急わかしお6号で、元気に次の旅先へ。

おわりに

御宿町は日西墨交流400年を超える史実を背景に、青少年の交流や姉妹都市提携の推進に努力している。日墨学院高校生のホームステイ受け入れは、この構想の一環として歓迎したもので、多くの実施協力者の積極的な支えにより稔りある滞在を願った。

生徒が記念植栽した皇帝ダリア(写真)はメキシコ原産の花で、御宿町に毎年美しい花を咲かせることを期待。それはまた生徒たちの成長を心から願うものである。

わずか2泊3日ではあったが、生徒たちの来町は新聞3社にも取り上げられ、思い出の1ページに加えられたことと思う。御宿アミーゴ会は皆さんの再訪を歓迎する。メキシコと日本の交流に資することが出来れば幸いである。(了)

[編集部注：土屋さん提供の『日本メキシコ学院の高校生ホームステイ受け入れ御宿町滞在報告』より勝手編集し転載しました]



御宿町、テカマチャルコ市と姉妹都市提携へ

御宿町はドン・ロドリゴ総督の故地であるプエブラ州テカマチャルコ市と相互交流を重ね、メキシコ友好親善使節団(同町国際親善協会派遣;10月21日~30日)の訪墨途次、姉妹都市協定の調印を行います。テカマチャルコ市はアカプルコ市に続く同町2番目のメキシコ姉妹都市となります。(編集部)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

お知らせ

メキシコ・日本アミーゴ会 2013年度総会・懇親会

日時：2013年11月7日(木)

総会：18:00~18:30

懇親会：18:30~20:30

会場：銀座 ZEST(中央区銀座1-2-3 G-Zone 銀座)

電話：03-5524-3621

会費：一人5,000円

案内：会員宛て別途郵送にて案内

あとがき：通巻第16号/2013年10月号をお届けします。いつまでも猛暑続きと思っていたら、いつの間にか秋の風情が深くなっています。お互いに健康管理が大変ですね。今号も読み応えのある記事満載です。読書の秋の夜長にお楽しみください。リセオの選抜高校生が参加する「日本文化交流旅行」に伴うホームステイは、今年も会員はじめ皆様の絶大なご協力をいただき成功裏に完了しました。有り難うございます。本年は支倉常長慶長遣欧使節の石巻市月浦出帆400周年。仙台市博物館では特別展が開催中で、震災被害を受けた石巻市の使節船ミュージアムも11月4日に再開予定。[か20131012]

2013年のメキシコあれこれ

会員 櫻田 和子

今春、3年ぶりに次男とメキシコをたずねた。亡き主人と交流のあった方々とお会いし、お互い次世代に友好をつないでいけたらという思いで3月の初めから、コロニアデルバジェに腰を落ち着けてかなり精力的に動いた。

折しもハカランダの満開の時期で皆、二世を伴って春の宵を楽しんだ。昨年末には大統領も交代し、若き45才のペニャ・ニエト氏が向こう6年治めることになる。TPP参加やdroga(麻薬)、原油生産量の低下等、課題は山積していると思われるが、テレビは専ら新ローマ法王のニュースでもちきりだった。

悠長な国民性は変わっていないが、活気が出てきていることは日系の方々が異口同音に言っておられた。

特に若い世代が粗野な部分から少し抜けて、自分の将来の目的をはっきり持ち始めていることは各所で感じた。と同時に



「わが祖国の若者はどうなっていくの？」と思うと、鳥肌の立つ思いがした。

かつて私共が滞在していた頃、すなわち30年近く前とくらべて、家事手伝い(muchacha)の給料は週1,000ペソ~1,500ペソ、日本円で10,000円~15,000円(3月時点で1ペソ≒10円)とレベルアップしていて、住み込みから時間契約になり、彼女らの子女への教育熱は一段と具体的になってきている。

あの頃禁じられていたので接触がなかった、ペセロバスを使ってみた。それぞれ1ペソと5ペソで乗れる。さすがにペセロは止めたが、インスルヘンテスのど真ん中を行き来するメトロバスは市民の足になっていて、多少交通渋滞の解決策になっていると思われる。

又、ビアドクトに沿った形で毎夜並ぶ屋台にも行って見たが、想像以上に品数もあり豊かな内容のメキシコ料理が味わえた。リセオの井上先生の紹介で空手の先生が出している屋台を訪ねた。ホームステイの話等すると、にこにこしている御馳走になった。豚を捌いて耳まで料理する。足も勿論つま先までであった。

ソウマヤ美術館の新館が市の北西部に2011年3月開館した。1994年開館の南部の旧館と同じく、メキシコの大富豪カルロス・スリムが夫人の名を冠して建設した。ポランコの新館は延べ床面積6,000㎡、収蔵作品6万6,000点、建物の形体は、エレベーターはあるが階段なしの蝸牛形。Surrealismoの作家ダリ等の作品が多いが、ガラスケースも仕切りもない裸の状態

展示。床にカラーテープを張って、ここからは近寄らないようにとおおらかなものである。収蔵品は世界一を誇る。大した収集数である。小走りで見ても半日はかかる。

スーパーマーケットは昔と違って、かなりアメリカナイズされて垢抜けして、品数も数倍増えて見事なものだが、素朴さと泥臭さは姿を消した。ふと、アメリカにいるような錯覚におそわれる。中産階層が増加したため購買力も上昇していることが、日々のことゆえわかりやすい。

今回は観光ではなかったので専らシティの中でうろうろしていたが、一度大使館の日本関連行事によられた。このたびの大震災のチャリティも兼ねていたので、いろいろな方に出会うことが出来た。

リセオ高校生と再会

昨年のホームステイで預かったアンドレス・マリスカル君の両親が、国立劇場の民族舞踊に招待して下さった。1列目の席で、エプロンステージから羽根飾りのソンプレロをかぶった6人のダンサーが太鼓をたたきながらせりあがってきたときは、思わず涙が出た。懐かしさと30年前のさまざまな思い出とに。

この後すぐ近くの、悲劇の画家Frida Kahlo(フリーダ・カーロ)が結婚披露宴をしたレストランで食事をした。とてもSimpáticoな両親で、この先息子たちがなにかにつけいい交流をつづけることだろうと思った。



今年のホームステイの2人の男子高校生はそれぞれ19才と17才で、そのうちのツル・ユキオ君の曾祖父は、かつての大東亜戦争の火ぶたを切った山本五十六に100万バレルの石油を送ったメキシコの日本人実業家、都留競氏である。競氏は高名な経済学者、都留重人氏のハトコにあたる人。アミーゴ会前事務局長の関口氏から競氏の自伝(編集部注:アミーゴ会だより通巻第8号2011年10月参照)をお借りして読み、氏のエネルギーで立派な人生に敬服するとともに、このような先祖がおられたことを若い人たちが知って、学んで、血肉にしてほしいと思う。(了)

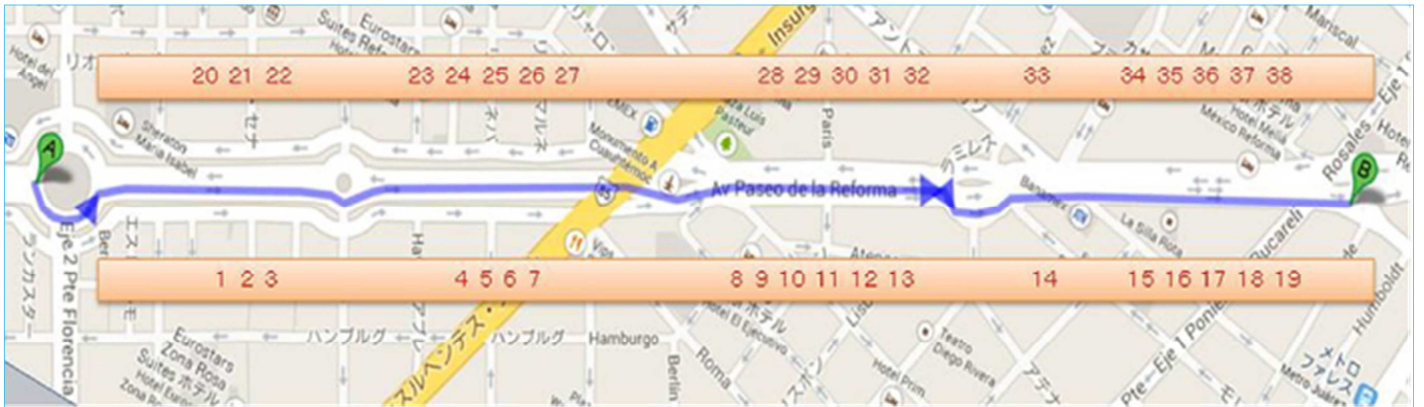
レフォルマに並ぶ歴史①

～銅像でたどるメキシコ偉人案内～

[編集部注：今号からシリーズで、(株)メキシコ観光のメキシコでお仕事をされている若いお二人の力作をお届けします。通常の旅行ガイドにも載っていない内容で本邦初演とも言えるものです。これであなとも“レフォルマ通”です。筆者は山内さん(チケット課)と酒井さん(ペリカントラベルネットワーク課)ですが、お二人からは「フレッシュな新人、今日も元気ががんばっています」とのメッセージを頂いています。ご期待ください。]

メキシコ観光 山内勇志/酒井 梢

レフォルマ通りに立つ独立記念塔といえば、誰しもがその姿を思い出すことは難しくないだろう。独立記念塔、ディアナ像、コロンブス像……多くの像が道路の中心にある中、独立記念塔から北にかけて設置されている、まるでレフォルマ通りを見守るかの様な銅像の数々をご存知だろうか。銅像は独立記念塔から Caballito 像区間の 38 体と、Caballito 像から北のレフォルマ通りに沿って 40 体の合計 78 体設置されている。下記の地図の A 地点が独立記念塔、B 地点が Caballito 像である。今回はこの区間の銅像にスポットを当てて紹介する。



Don Miguel Ramos Arizpe (地図中 1)は「連邦主義の父」と呼ばれる。



1775 年 2 月 5 日、現在のコアウイラ州で生まれる。1803 年メキシコにて司祭に叙階され、1807 年にグアダラハラ大学にて博士号を取得した。

1810 年には Cortes de Cádiz に選出されたが、1814 年、厳格な王に対する反逆罪で告発され、独立運動をした罪によりマドリッドの刑務所にて刑期を

過ごした。

メキシコ独立が達成された時、彼はメキシコに戻り、翌年 1822 年には憲法委員会の会長として働いていた。憲法議会内での議論は中央集権型の共和国支持者と連邦共和国を確立しようとした人々の間で熱狂していた。激しい政治的衝突に彼は健康を損ない、1843 年 4 月 28 日に死亡した。

右図の様な 5 ペソ硬貨をご覧になったことがあるだろうか。2010 年のメキシコ独立 200 周年、革命 100 周年の記念硬貨だ。もしかするとあなたの財布にも連邦主義の父がいるかもしれない。



Don Juan José de la Garza Cisneros (地図中 2)は 1826 年 5 月 6 日、現在のタマウリパス州で生まれる。法律家、軍人、そして自由主義の政治家でもあった。

1852 年から 1869 年の間にタマウリパス州知事選に 8 回当選した。

彼はまず弁護士の学士号を取得後、軍隊に興味を持ち勉強を始めた。1885 年、将軍の階級を与えられ



た彼は Ayutla Guerrero と共に Antonio López の独裁政治を終わらせた (Plan de Ayutla)。その他にマタモロスに文学と科学研究所を創立した。

最後の州知事の任期を終えた後、メキシコシティに引越し、最高裁判所の司法官として働きつつ、大学で法律の授業を行っていた。20 年後に地元タマウリパス州に戻り、93 年 10 月 16 日に死去した。

Don Francisco Manuel Sanchez de Tagle (地図中 3)は 1772 年 1 月 11 日、現在のミチョアカン州モレーリアで生まれる。詩人・作家・弁護士・政治家。

メキシコ市 San Juan de Letrán 大学にて哲学・神学・法学を学んだ。

科学と学問の知識を豊富に学ぶことをこよなく愛していた。1801 年に弁護士の資格を取得した後、哲学を学んだ。1808 年、メキシコ市議会の役員になった後、14 年には Cortes Españolas (スペインの裁判所) の議員に選ばれた。



Congreso Nacional Mexicano の初期メンバーであり、1821 年には独立文章を書いた一員であった。

1824 年、1825 年にはメキシコ州の副知事に選ばれ、1835 年、七つの憲法を発行した委員会を率いる。1847 年 12 月 5 日に首都で起きた暴動の際に強盗に遭い、その際負った傷が原因で二日後に死亡した。

ここで彼のポエムの 1 つを紹介する。彼のポエムの中でも有名な愛を歌ったポエムだ。

Poema contricción poética

¡Oh lira, que hasta aquí locos amores

en tus vibrantes cuerdas suspiraste,

y dócil a mis voces me ayudaste

a comprar por un goce mil dolores!

Ya que hiciste armoniosos mis errores

y a mi locura seducción prestaste,

herida de otro plectro, da, en contraste, con

acuerdo mejor, tonos mejores.

Llora de los pasados años míos prolongada

maldad, crímenes tantos,

y tan multiplicados desvarios:

de amarga contricción rige los cantos

en que le pida, con acentos píos, misericordia al

Santo de los Santos.

- 悔恨の詩 -

ああギターよ、君の振動する弦はまるで
狂気のでため息をついているようだ。

慎ましい君の音色は

喜びにも似た千の痛みをくれる。

上手に弾けなくとも、情熱の心を魅了させる。

ピックは優れた和音とトーンを奏でるが、

傷を隠しきれない。

多くの悪意や罪悪、そして決して叶うことのない

誇張された夢は涙を与え

ギターの奏でる音は歌を苦い悔恨の歌にさせる。

何回も聖人に哀れみを頼んでしまう。

この詩は演奏者がギターを弾く間、昔の愛を思い出し、後悔の念を歌い恋人に戻ってくるよう神に願うが、それは一生叶うことはなく、それを悲観する歌のようだ。

レフォルマ通りには、メキシコを語る上で必要不可欠な歴史人が勢ぞろいしている。知名度の高くない人物もいるが、彼らの功績無くして今のメキシコは存在しなかったのだろう。その彼らにスポットを当てていきたいと思う。(つづく)

[編集部注 : MEXICO KANKO S.A de C.V. のウェブ : <http://www.mexicokanko.com.mx/es/bienvenida>]

“ひとり弥次喜多ブス旅行”

～2012年メキシコ周遊紀行・その3完結編～

海外旅行作家 京免 宣昭

【編集部注：海外旅行業界 OB の京免宣昭(きょうめん・のりあき)さんより、1 ヶ月に及ぶメキシコのバス(bus=スペイン語でバス)による周遊紀行を石井あけみ幹事の紹介でお寄せいただきました。筆者は現在、NPO 法人シニア大樂の専任講師として「安心の海外旅行」と「世界遺産への旅」を講じて活躍中です。今回が連載 3 回目の完結編です。なお、筆者のご了解を得て、編集部が見出しを付し、名所旧跡の説明を旅行ガイドに譲るなど玉稿を圧縮し、筆者の“メキシコとの出会い”を主内容とする勝手編集を施しました。】

目次

- 3月29日 成田発～アトランタ経由メキシコシティ着(航空機)
- 4月02日 メキシコシティ～ボサリカ往復(バス)
 　　<ここまで第14号/2013年4月号に掲載済み>
- 4月04日 メキシコシティ～モレリア(バス)
- 4月05日 モレリア～グアナファト(バス)
- 4月06日 グアナファト～サンミゲル・デ・アジェンデ(バス)
- 4月07日 サンミゲル・デ・アジェンデ～ケレタロ
 　　～メキシコシティ経由クエルナバカ(バス)
- 4月10日 クエルナバカ
 　　～メキシコシティ経由オアハカ(バス/航空機)
- 4月14日 オアハカ～プエブラ(バス)
 　　<ここまで第15号/2013年7月号に掲載済み>
- 4月16日 プエブラ～ベラクルス(バス)
- 4月16日 ベラクルス～トラコタルパン往復(バス)
- 4月18日 ベラクルス～ビジャエルモッサ(航空機)
- 4月20日 ビジャエルモッサ～カンペチェ(バス)
- 4月23日 カンペチェ～ウシュマル～メリダ(バス)
- 4月24日 メリダ～チチェン・イツァー往復(バス)
- 4月26日 メリダ～カンクン(バス)
- 4月27日 カンクン～トゥルム往復(バス)
- 4月29日 カンクン～アトランタ経由～4月30日成田着(航空機)

ベラクルス

4月16日(月)：8時半発のバスでベラクルスまで凡そ3時間半の乗車時間だ。今日まで天候に恵まれ快適な旅を続けて来たが、ベラクルス地方の天候があまり良くないとの情報を得ていたため、色々な見学先の優先順位をつけながら以下の通り実行することにする。先ずベラクルス・ブスターミナル到着後、荷物を預けて、世界遺産トラコタルパンを見学してから、ホテルへチェックインする。翌日、天候にもよるが、朝1番に2カ所の要塞を巡り、その後郊外のセンポアラ遺跡を優先し、余裕があればラアンティグアに立ち寄り、市内へ戻る計画を立てる。定刻通りベラクルスへ到着。早速、荷物を預けてトラコタルパン行きのバスを探し乗車する。ベラクルスから約90kmの距離にあり、所用時間は片道約1時間半かかる予定だ。

トラコタルパン(世)はカリブ海に注ぐババロアパン川の中州にある町で、19世紀に交易港として重要な位置を占めていた。時代と共にその地位を失うが、繁栄当時の建物や公園等がそのまま残され、1998年世界遺産に登録された。遅い昼食に川沿いの店で舌ヒラメを食べるに当たり、以前のような料理内容(moho)で注文をしたところ、これも大当たりで美味しく頂く。

そろそろベラクルスへ戻ることにしバス停へ向かい、約20分ほど待ってバスが来たのでベラクルスへ直行。ベラクルス到着後荷物を受取り、タクシーでホテルに向かう。ドライバーにホテル名を云うとOK返事で発車。その頃から雨が降ったりやんだり、道路も混雑し始めたこともあり少し時間がかかり気味であるが、無

事ホテルへ到着。チェックインし、シティマップを見ながら、主要見学地の位置関係とベラクルスには中華レストランがあると友人から聞いていたので、その位置も確認する作業を行い、部屋へ入る。

何と中華街らしきものがあるとは、とても嬉しい。本音を云うと、タコスやトルティーヤ類は日本で食する場合と本場とでは味付けに余りにも落差があり、少し飽き飽きし始めていたので、そろそろ他のものと思っていた所である。今夜は中華に決定し、ホテルから5分程の中華レストラン街の一軒に入る。アラカルトもあるがビュッフェスタイルのメニューに決めて食事を済ませる。アルマス広場も直ぐ近隣にあるので寄ってみると、多くの市民が輪になり楽器演奏に合わせてダンスに興じている。周りの建物もカテドラル、コロニアルな風情のあるビル群で、明日も来てみようと思いつきながらホテルへ戻る。

4月17日(火)：今日の天候は雨模様であるが風が少し強く吹いている。ホテルレストランで朝食後、徒歩5分の遊覧船乗り場へ行きサンファン・デ・ウルア要塞行きのフェリーを探すがどうも様子がおかしい。停泊中の別の船の関係者に聞くと、風が強いため今日の船の運航は中止かもしれないと云う。確かに海も少し波立っている。この場所の真後ろに海軍省のような建物があり、制服を着た士官が丁度手順に則り国旗を掲揚している最中で、旗が大きくはためいていることでも風の強さが良く分かる。

要塞へタクシーで行くことにして、何台か交渉しても60ペソ(約400円)だと云う。仮にバスで行ってもバス停から要塞まで3～4キロの距離なので、タクシーに決定。要塞は港の向こう側にあり、倉庫街や役所等のパーキングに着き、要塞の場所を聞きながら港方面に行くチケット売り場があった。早速、係員に見学後フェリーを利用して向こう側に渡りたいのだがと切り出すと、今日は強風で休航だとはっきり言う。諦めて要塞見学に向かうが、その頑丈な作りと分厚さに先ず驚く。1582年に築造され、メキシコ独立戦争終結の1825年、当要塞に立てこもっていたスペイン軍守備隊が降伏してスペインの植民地時代は終焉した、歴史に残る要塞である。「強者どもの夢の址」と感傷的な雰囲気を保ちながら、パーキング辺りへ戻るとタクシーはいない。屋台の人はOne moment という。という内に1台来たので乗ろうとすると、急に1人のセニョールと一緒に乗りたいと云うので2人で乗車する。彼は市立博物館の職員で、博物館はサンティアゴ要塞と徒歩5分もかからないから是非博物館に来て欲しいと云うので、訪問の約束を交わして先に降りる。

ベラクルスはメキシコ最古の植民地で、海賊の襲撃に備えるための要塞が9カ所築造されたが、サンファン・デ・ウルア要塞とサンティアゴ要塞のみが原型をとどめているという。後者は1635年に築造されたが、埋め立て地が広がったため海岸線から離れてしまい、現在は博物館となっている。

市立博物館に行くとき先程のセニョールがおり、職員と打ち合わせ中にも関わらず案内してくれる。ローカルな博物館でこれと云うものは少なかったが、これから行く予定のビジャエルモッサのラベンタ遺跡公園にある有名な巨石人頭像と同様なものが展示されており、思わず**It's original?**と問うと、彼は**Original Sir**と答える。まさかここで出会うとは思っても見なかったので、旅の不思議な出会いに感激する。

この後アルマス広場へ行こうとすると少し雨が降り始め、傘をさしながら歩く内に急に強くなってくる。雨を避けるため立ち止った所はコンビニ・スーパーのような店で思わず入ると、カフェカウンターがあり数人の客が食事をしている。少し早いけどここでランチしようと思い立ち注文する。コーヒーマシーンも初めて自分で操作し飲んだが、容器は日本のビッグサイズよりはるかに大きい。メニューは俗に云うBLT(ベーコン・レタス・トマト)サンドイッチだがとても美味しく頂いて満足。

お店の人にバス停の位置を聞くと、直ぐ前がバス停で右方向のバスだと云う。**Gracias**と挨拶して向かうと雨の中、数人の人がバス待ちをしており、ブスターミナルへのバスを尋ねると、1人のご婦人が自分もターミナルに行くよと云う。本当に有難い。雨中にも関わらず以外に早くターミナル到着。ご婦人ともお別れしてターミナルに行き、約40km離れているセンポアラ遺跡へ行くバスを探すとこれも直ぐに見つかる。但しカルデルと云う所で乗り換えるので、先ずカルデルまで行きなさいと云う。何とかなるだろうと思って出掛ける。これが以外にも大変だった。何故なら、カルデルまでは順調に行くが、そのカルデルからセンポアラに行くバス乗り場が分からずかなり時間を費やし、ようやく分かったことは、カルデルの街のセントロ地区からバスがあるらしいとの確かな情報を得てセントロへ向かうが、これが結構な距離で多分20分以上歩く。やはり、何とかなるだろうと云う曖昧なことは良くないと思うと共に、あの時カルデルのどこにバス乗り場があるのか確認をしておけば良かったと思ったが後の祭り。ようやくバス乗り場が見つかるが、バスの頻度が余りないのでやむなくタクシーで行くことにする。センポアラ遺跡は13世紀頃に築造されたトトナカ族の都市遺跡で、敷地もかなり広く平坦な広場の緑が雨に映えて美しかった。

遺跡のチケット売り場の人にバスの発時間を尋ねるがバスのダイヤが余りなく、バス停まで15分はかかると云われ戸惑っていると、タクシーは乗り合いが出来るから通りまで行って探すように云うので通りへ向かう。何台かタクシーが通るが、満席。その内余席のある1台が来るのでカルデルまでと云うと乗車OK。無事カルデルに到着するが雨が激しくなり、やむなくショッピングセンターのカフェに入り少し待機することにする。もう午後4時を過ぎている。

余裕があればラアンティグア(征服者コルテスが第一歩を踏んだ村で、コルテスの家等が残っている)へ行きたかったが、ここからのアクセスはタクシーしかなく、しかも強い雨の中行っても帰りのことも気になるので、諦めて市内へ戻ることにする。雨は依然として降り続けているが、そろそろ帰ろうとベラクルス行きのバス停は何処か聞くと、この道を真っすぐ行くと右手にあると教えてくれる。バス停にはチケット売りの若い男子がおり、にこにこ笑いながらチケットを売ってくれる。こうしてベラクルスに戻ると雨は止みつような感じである。もう既にホテルへの行き方も覚えており、ターミナルに来た時の反対にあるバス停に行き、バスでアルマス広場と云って乗り込む。アルマス広場に降り立った時には雨はやんでいる。ここで降りた理由は昨日カテドラルを見学していなかったことと、昨日見た尖塔を持つコロニアル風建物を良く見たかったからだ。カテドラルは今まで見て来た豪華絢爛なものとは異なり、落ち着いた雰囲気のある教会であり、コロニアル風の建物は何と市庁舎である。道理でなかなか洒落た建物だと思う。

以上でベラクルスの見学を終えた。正直なところベラクルスの街自体には余り見学するパーツは多くない。明日は後半の最初のハイライトであるビジャエルモッサへ10時55分発の航空機で向かう予定だ。ベラクルス空港で2回目の両替をするが、ペソが一段と安くなっており当方にとっては有難いが……。

ビジャエルモッサ

4月18日(水): 約1時間の飛行で無事ビジャエルモッサ空港に到着。バスカウンターでパレンケ、カンペチェ、チチェン・イツァー、カンクン行きのチケットを買い求めて、チケットタクシーでホテルへ到着する。

実はここで大失敗をするのである。ホテルへ到着してから、日程やホテルコンファメーション等が入ったファイルがないことに気がつく。空港のバス又はチケットタクシーカウンターに置いて来たとしか考えられない。ホテルの係員に事情を話し、直ぐに空港へ連絡を取るように依頼するがなかなか連絡が取れず、当方はラ・ベンタ遺跡公園見学に行きたいとのジレンマで、見学を終えるまでに解決しておいてほしいとお願いして出掛ける。結果は、ファイルは空港のチケットタクシーカウンターにあり保管をしているが、タクシーがホテル近くに来る際に届けるとのことで、無事ファイルは届いていた。誠に自分のミスを棚に上げての言い草だが、メキシコの人達の親切さが身にしみて感じている今、日本を出る前に友人との打ち合わせの中で、メキシコで荷物を預ける行為等はもってのほか、みすみす荷物を相手に渡してしまうようなものだと注意されたのを真に受けていた自分が恥ずかしくなってきた。

高校生に臨時講義

ラ・ベンタ公園に行くには乗合タクシーしかなく、10台以上待つてようやく乗ることが出来た。チケットカウンターは多くの見学者、特に学校の生徒達で混雑している。ここでもハプニングが起こる。実は非常に面映ゆい話であるが、地元の高校生一行が課外研修のため見学に来ており、一緒に行動する機会が多くなり、指導教師が話しかけて来て、**Where are you from?**から始まり、**I came from Japan, I'm a tourist.**と答えると、

その後は「遠くの国からようこそ。メキシコへ来た目的は。費用はどれくらい。どうして1人で旅行を。あなたの仕事は。東日本大震災と原発のことは？」等多岐にわたる質問攻めを受ける。私は一つ一つ丁寧に説明する中で、「私は国民としてのデューティを果たし、満40年間仕事をしリタイヤーして、今の私があり、今ここにきている」と云う話と、「日本人は今、大変な困難に陥っている、どんな形であってもいいから皆様方のヘルプをお願いしたい。決して金銭を要求しているのではない。励ましの手紙でもなんでも等」、最後に「日本人はこの困難を必ず overcome する」との話に、教師は「今、あなたが話した3つのことを生徒に話をしてくれないか」と云うではないか。

その教師は担当クラスの生徒を集め始めたので引っ込みがつかなくなってしまう、今話を遺跡公園内の日陰で手短かに話し始めた。生徒らは熱心に聞いてくれ最後まで話し終えた。その途端、生徒らは拍手で私を迎え写真攻めに遭遇する。その教師は別の話として「今の子は甘やかされて育ち、我慢をすることが出来ない。最後までやり遂げると云うことが出来ない等」と言う。全く何処かの国と同様な悩みを抱えているのにびっくり仰天。名残を惜しみながら別れるが、メキシコでのハプニングの1つでもある。

帰途はやはり乗合いタクシー。ホテル近くに行くタクシーがなかなか来なく結構苦労するが、ようやく見つけてホテルへ戻る。明日出かけるブスターミナルまでの道順を確かめるため、徒歩で行って見ると凡そ15分で到着出来、これなら徒歩でもOK。その帰途、夕食を取り部屋へ戻る。シャワーを浴びたり、荷造りをしたり、テレビを見たりして時間を費やしていたところ、午後10時過ぎ突然ロックかジャズらしき生演奏が聞こえてとてもじゃないけれど騒々しい。部屋は3階だがこれでは多分就寝は無理と判断して、フロントへ行きあの騒音は何？と聞くと、このホテルの地階に生バンドが入居しているとのこと。部屋を移動させてくれと云ってチェックしてもらおうと6階に2部屋あるので見てほしいと云われて係員と行き、その1つに決め、2人して荷物の移動を行う。部屋を移動することは珍しいことではないが、このホテルの地階に生バンドが入居しているとはつゆ知らずで、それでも3階よりは少し騒音は緩和したので助かった。他の人達は平気なのかと思いつつ眠りに着く。明日は、パレンケだ。

パレンケ:マンゴに武者ぶりつく

4月19日(木):朝9時45分発のバスで予定通り出発。パレンケのターミナルまで約2時間を要し、その傍から乗合いマイクロバスが5分も待つことなく出発してパレンケ遺跡へ向かう。8kmの距離を約15分程で遺跡へ到着。入場券の販売は2段階で、最初に自然保護区への入域料を支払い、次に遺跡見学科、即ち入場料を支払う。遺跡への入口(入場料支払い窓口)までの間が広場になっており、周りには土産品店や屋台が並び簡単な食事も可能で、ランチを済ませようと屋台店に入りタコス、コーラと大きめのマンゴを注文する。新鮮なマンゴはとても美味しく両手を使って武者ぶりつくものだから、店のセニョリータがにこにこ笑いながら見守っているのに気がつき、Delicioso と云うとGracias と答えてくれる。食事代はいくらかと聞くと

全部で40ペソ(約260円)だと云う。日本だったらマンゴだけでも○百円はするはずと思うと、当方も思わずニコリ。少し落ち着いてからチケット売り場に向かい入場する。パレンケ遺跡は今でも周囲は深いジャングルに囲まれており、また坂道を登る建造物やジャングルの中の下り坂を歩くこともあり、履きなれた靴で行く準備が肝要である。

遺跡からパレンケの街に戻るには、博物館途中の道へ出て通るマイクロバスに手を挙げれば止まってくれるので簡単。そしてターミナルで下車してビジャエルモッサへ戻る。明日は最後の長距離バスに乗車してカンペチェへ向かう。旅の日数も残り少なくなって来た。

カンペチェ

4月20日(金):バスは8時5分発。ホテルからキャリーバッグを引きながらターミナルへ歩いて向かい、約15分で到着。ただターミナルで多少のトラブルが初めて発生する。それは多分バスが何らかの事情で来られなくなり、代替バスを配送しているため多少遅れるらしい。その内ようやくバスが到着と案内されて乗るが、約40分遅れで出発。バスの遅れは初めてだ。カンペチェ到着時刻は午後2時半頃かと見当をつけたがピッタリだった。かなり長い乗車時間にもかかわらず退屈もしなかった。何故なら、バスは内陸を走ったり海沿いを走ったりするので、それを見ているだけで絵のような美しいシーンが数多く見られるからである。そうこうしている内にカンペチェへ到着。ターミナルのカフェで食事を取り、その後タクシーに乗りホテルに向かう。とても感じの良いタクシードライバーで、何の不安もなくホテルへ到着。

早速チェックインとシティマップの説明を受け、部屋へ入って直ぐ見学に出掛ける。最初の見学箇所は海賊博物館や一部の砦等から始めるが、海の近くには「海門」、サンフアン砦・サンフランシスコ砦には「陸門」の2つの立派な門があり、往時からここが城壁内への出入口であり見所のポイントである。カンペチェはスペインにより最初に造られた要塞都市で7つの砦や城壁が築かれたが、現在でも面影がそのまま残っており今は主に博物館となっている。見学後、ソカロへ向かいカテドラルや周辺を散策しながらホテルへ戻る。ホテルのスタッフとエズナー遺跡の見学に向かうための乗合いバス等の打ち合わせを行う。

4月21日(土):エズナー遺跡への乗合いバス乗り場はアラメダ公園とメルカドとの間の一角にあり、朝一番(午前7時)のバスにも関わらず既に満席状態、何とか割り込んで乗ることが出来た。前日ソカロからホテルへ戻る際、パン屋でドーナツ・ジュース等を買いき、現地に着いたら食べようと準備をしておいた。バスは15分程遅れて出発。後期マヤ期のエズナー遺跡は南東方向約52kmにあり、バスで1時間を要する。この遺跡に向かう道の先には次に見学を予定しているウシュマル遺跡(世)がある。

エズナー遺跡に到着したが、9時開門まで少し時間があり周辺を散策しながら開門を待つ。開門となりベンチで用意して来たスナックを食べてから、チケットを購入し遺跡マップを見ながら向かう。徒歩約5~6分で遺跡が目の前に現れる。遺跡の周囲は全て深いジャングルに囲まれ、先ほどから虫の集団がまとわりつ

いて来ることに気が付いたが、蚊ではないものかなりしつこいので要注意だ。

遺跡を後に乗合バスで市内へ戻るため、やって来るバスに手を振るが全て満席の状態に乗ることが出来ない。それでも諦めるわけにはいかず、とにかくヒッチハイクスタイルを続けるしかない。ようやく一台のバスが止まってくれるが、満席。ドライバーに床に座るから乗せてくれと云うと OK してくれる。周囲の乗客は最初は「変な外人」と見ていたようだったので、自己紹介から始めて英語とスペイン語で知っている限りの単語を繰り返してコミュニケーションを図る。近くのセニョリータが日本語でアリガトウ、サヨナラ、オハヨー等の言葉は以前日本人から聞いたことがあるとの話から徐々に堅さが取れ、乗客は一族郎党でこれからカンペチェのメルカド(市場)に買い物に行くとのことである。この時も飴と袋菓子を持参していたので小児 2 名にあるだけプレゼントをする。その内に見なれた景色になり、皆さんにローカルのブスターミナルの近くで降りたいと話すと、ドライバーも OK してくれる。皆と分かれて降車した場所からターミナルまで約 1km はあるが、とても分かり易くて無事到着。何のためにここに来たかと云うと、ターミナルの場所の確認とウシュマル遺跡行きのチケットを買うためである。実はこのバスは通勤通学も含めて大変混雑すると、ホテルとの打ち合わせで聞いていたからである。

チケットの購入も済み、この場所の通りを真っ直ぐに行けばメルカド(市場)方面に行き着くと分かり、徒歩約 20 分で到着。そこで、ランチを取ることを決める。メルカドの一角にある簡易食堂で、トルティーヤ、ジュースとバナナを食べ終わり、地図と日本語のガイドブックのコピーを見ていると、立派な体格のおばさんが多分、ああ、これが日本語なのか、Japonés? と云うような顔をして覗き込んで来るので、Sí, Japonés. と答えるとニッコリ笑いながら Relaxedly(ごゆっくりというような意味)と言って食器を片づけてくれるので、お言葉に甘えてこの後のことを考えながら少しの間休息を取る。そろそろ出掛けようと思い、Cuánto?(おいくらですか)と云うと Sí Señor 40 pesos.(約 260 円)と、ここでもお安いランチで済ませることが出来た。Gracias と云って外へ歩き始め、次の見学地の確認のため地図を取り出そうとしたがファイルが見つからない。あれっと思いお店へ引き返そうと振り返ると、おばさんの娘さんらしいセニョリータがそのファイルを持って追っかけてくるではないか。わざと忘れた訳ではないが、少し気が緩んでいるような気がした。再度気を引き締めよう。Gracias を連発して受け取る。実は翌日もここでランチを取り且つバナナも購入した。

昼食後、最初の日に見学した陸門を通り真っすぐソカロ方面に向かい、海門を通ってラソレダー砦に向かう。この砦はソカロの傍にあり、マヤ建築博物館としてカンペチェ近郊の各遺跡群からの出土品がかなり多く展示されているので、シャッターを多く切る。本来ならばカラクルム遺跡(世)に行く計画であったが、グアテマラ国境まで行くとなるとアクセス等の問題が多く諦めたばかりであったため、集中的に見学する。

サンカルロス砦の屋上から市内を展望した際、東方

向のカテドラルとは別に右方向(南)にかなり大きな教会が建っているのが気になったので立ち寄ってみることにする。ガイドブックには一切記述もなく、スペイン征服後建てられたものであることは間違いないはずだが、今は閉鎖されている。数人の外国人観光客が盛んにシャッターを切っていたのが印象的であった。

野菜サラダの新メニュー

この日の夕食での出来事を話そう。ホテルから歩いて 5 分弱の通りに彫刻像が整然と展示されている。その通りに面し海賊像が出迎えるメキシカン料理の店に入る。お客様は早いせい私 1 人だ。今晚はどうしても野菜サラダが食べたくて、セニョリータに説明をするがなかなか埒が明かない。そこへご婦人の主人がおいでになり私達の会話を聞きつけ、What do you want? と流暢な英語で話しかけて来て、私は I want to take a vegetable salad tonight. と話し、どんな野菜があるか尋ねているところだと答えると、主人は Si Señor, come to our kitchen, pick up please. と云うではないか。Really? と驚く間もなく先導してくれる。意を決してキッチンに向かい、レタス、オニオン、キャロット、アボガドを選び、その上にスライスしたベーコンとチーズをと云って席に戻る。それ以外に例のコンソメスープを注文する。先にスープが来てパンと一緒に食べ終わる頃、ソーサーに小山! の感じのサラダが来るではないか。主人は Moment と云いながら、“とても素敵ね、私も気に入ったわ” とデジカメを取り出して何枚か撮り、Facebook に掲載すると云う。Do you have a facebook? と尋ねられたが、No, I do not have yet. と答えたのでそれは残念と云いながら、私の席に自ら運んで来てくれる。Facebook はここまで使いこなされているのか驚くと共に、主人がこのメニューを気に入ってくれたことがとても嬉しい。多分、今晚の 1 品がメニューに付け加えられるのではないかと期待しながら……。因みに、この時の代金は 125 ペソ(約 820 円)で、別途チップを 20 ペソ(約 130 円)置いて来るが、超安!! 明日は、カンペチェ最後の滞在だ。

サンミゲル砦とサンホセ砦

4 月 22 日(日): 昨夜の出来事を思い起こしながらゆっくり起床し、その気分のままホテルのレストランで朝食を取る。当ホテルの奥には小さいながらもプールがあり、青い水をたたえている。今日は時間があれば是非カンペチェの海辺にも行きたいと思っている。フロントでバス乗り場を確認して、先ず西方約 5km のサンミゲル砦、次に東方約 5km のサンホセ砦の見学に向かう。ローカルバスは何台か止まるが目的地に行くバスではなく、各ドライバーから必ず来るからと云われて待っていると、1 台のバスがサンミゲル砦方面に行くと云う。バスは混んでいるが、途中で大きな病院がありそこで降りる人が多い。約 20 分で、ドライバーのここだとの合図で降りる。バス停から徒歩約 10 分の坂を上りようやく到着。サンミゲル砦は 18 世紀、海賊の攻撃から守るため高台に造られた。現在、この砦は博物館として近郊のエズナー遺跡やカラクルム遺跡等から出土した貴重な遺物を展示し、遺跡見学好きにとっては嬉しい砦である。

市内に戻るためバスに乗るが、先程、多くの人達が降り立ったバス停でかなりの人が乗り込み、ほぼ満席

状態。私はもうカンペチェ市民と同じ感覚でこのブスがアラメダ公園の手前から廻り込むことに気がついていたので、廻り込む前のバス停で降りアラメダ公園に向かう。この公園前は数多くのバス路線があり、次のサンホセ砦行きのバスが間違いなくあると思っているからである。案の定バスが見つかり、ドライバーにバス停を云うと OK との返事に安心して乗り込む。砦まで約 20 分位かかりドライバーの合図で下車。サンホセ砦はバス停から 5 分程度のなだらかな高台にあり、やはり 18 世紀、海賊の攻撃から守るため造られた。この砦には、当時の砦生活の生活用品やスペイン人が持ち込んだ様々な生活道具等が展示されている。この付近は公園のように整備され、家族連れや仲間同士がピクニック気分でお弁当を広げて食べたり、歌ったりして楽しんでいる光景が微笑ましい。

こうしてランチタイムも遅めになってしまったが、再度アラメダ公園(メルカド)の昨日お世話になった大豪華レストラン(?)に行くことを決めてバスで戻る。そこに着くとおばさんとセニョリータとおばあさんがいて、本当に嬉しそうに出迎えてくれる。早速、今日の豪華メニューはタコス、コークにマンゴをオーダーする。熱々のタコス、ソースやトッピングも美味しく頂き、フィナーレは豪華なマンゴで云うことなし。これでお支払いは 50 ペソ(約 330 円)、満足以外の言葉は見当たらない。明日は、カンペチェからウシュマル、メリダ、カンクンへ行くと云うと、おばさん達が *Adiós, Señor* と云い、お互いに別れの言葉を交わしその場を後にする。

多少時間の余裕が出来たので再び陸門をくぐり、ソカロ方面へ向かう。ソカロのカテドラルや市役所等を再訪問し、やはり昨日とても気に入ったラソレダー砦(マヤ建築博物館)の前へ行くと昨日のセニョリータが館前にいるので、その前で記念写真を撮る。実はホテルで写真の再確認の際、撮った写真でかなり暗く写ったものがあり出来れば再度入館出来たらと云う気持ちで何気なく聞いてみると、*Sí Señor* と云う。お言葉に甘えセニョリータについて堂々?と入場して撮影することが出来た。全く日本壮年の凶々しさもここに極まった感じである。この建物の同じ城壁の海門から海岸へ向かう。海岸線までかなりの距離があり、少なくとも 15 分はかかるような距離。大きな通りを 2 本横断してようやく海岸線が見えて来る。海岸線の大通りには防波堤が築かれ、中には昔の大砲が設置してある場所もあり、また散歩道も用意されている。海岸へ下ると、今日の波は比較的穏やかであるが、かなりの海の藻くず等が打ち上げられ海の中にも漂っている。この辺で泳げるのかどうか分からない。海岸線はとても長く、手前勝手だが、泳ぐ場所はこの辺りではなく別の場所だろうと想像しながら戻ることにする。ホテルに戻りこの話をすると、カンペチェ市周辺の海は泳ぎに適さず、西方のメキシコ湾寄りへ行った海岸が泳ぎに適した場所だと教えてくれた。

カンペチェのキッズダンス大会

再びソカロ方面に戻ると、今まで気がつかなかったが中華レストランがマヤ建築博物館の真向かいにある。しかし今日はスキップして、市庁舎の裏にあるホテルのレストランにしようとはぼ決めていたので向かう。

実は再訪したマヤ建築博物館のセニョリータから、今晩市庁舎通りの先で午後 8 時からグループキッズ達のダンス大会が行われると聞いていたので、それを観覧したりカテドラルのライトアップを見たりしてホテルへ戻る予定を組む。少し早めの夕食だがゆっくり取ろうと思い、メニューを見ながら、ガイドブックにあるパン・デ・カソンはどうか?とかボリュームはどうか?と尋ねると大きいと答えるので注文せず、トマトスープ、フレンチフライ付チキンのグリルにスプライトと食後にコーヒーを注文する。ところがウエーターは何を勘違いしたのか、先にコーヒーを持って来るではないか、食後と頼んだはずだと云うと下げてくれたが、後は大丈夫か心配になった。でもトマトスープも熱くて美味しく頂き、チキンのグリルも焼き具合を事前に云った通りになっており、持参したお醤油とマッチしてとても香ばしい味となり美味しく頂く。今晩は孤軍奮闘し、食べ残すことなく全部平らげる。もう満腹だ。食後のコーヒーはお砂糖をたっぷり入れて飲んだが、とても美味しい。

午後 7 時 45 分も過ぎたのでダンス大会の会場に向かう。徒歩 5~6 分の距離だ。会場に近づくと、かなりのボリュームの音楽が鳴り響きムードを盛り上げているような様子。会場の椅子も既に座る席がないほどだが、後方の中ほどの席が空いており座って待つことにする。8 時過ぎ、主催者の挨拶のあと直ぐにダンス大会が始まる。まあ AKB48 ではないが、いたいけな少女グループから始まるではないか。一生懸命に踊る姿に健気さを覚えると共に、何かしら大人のエゴが見え隠れするように思われてならない。何故なら、踊る当人よりも父兄かダンス教師らしき人物の方が盛り上がっているからである。奇しくも何処かの国の現状もこのような状況と少しも変わらないと再認識したのである。約 30 分くらい見てホテルへ引き揚げることにし、会場を離れる。ホテルで明日のウシュマル行きバスの 6 時発に合わせてタクシーの手配を依頼して、部屋へ戻り荷物の整理をする。

ウシュマル

4 月 23 日(月): 早朝 5 時、予約タクシーでブスターミナルまで約 10 分で到着。小さなターミナルだが早朝から混雑しており、多分、月曜日のせいかも知れないと判断したが全くその通りである。出発時刻の 6 時になり、座席は指定席であるがそれは最初だけ。ともかく山手線並みの通勤バスになり、この状態が 2 時間半位続くのでもうぐったり。乗客は男女を問わず年配の人、青少年と学生であり、途中で下車する人、乗車する人の繰り返しである。この路線のバスは 1 日 5 本しかなく、次のバスは 9 時過ぎ。このバスが通勤通学等に最適なため混雑する訳だ。

メキシコの道路標識は結構分かり易く、ウシュマルまで何キロの表示が段々少ない数字になることに興味深くなり、盛んに目で追うことにすることにして気を紛らわす。ようやく何カ所目かのバス停を過ぎて車内は少し空席が目立つような状態になり、外国人も数人いることが確認できる。10 時頃になりドライバーはもう直ぐだよと合図をする。停車。見かけた外国人と共に下車し、バス車体内に収納のバッグを下ろし、ドライバーに *Gracias* と云ってバスを後にする。

ウシュマル遺跡はバス停から 5~6 分の距離にあるが、今回はバッグを引いているので多少時間がかかる。ようやく遺跡のチケットカウンターに到着。早速チケットの購入だが、ここでも 2 段階で先ず入域料を支払い、その後で入場料を支払うシステムだ。

入場の際、無料でバッグを預けることが出来、これはとても有難い。実は今回のメキシコ旅行の際、ケレタロ及びウシュマルは経由地としての見学のため、バッグを預けることが出来るかどうか不安で、両方ともあらゆる方法で問い合わせを試みた。出発前にケレタロのブスターミナルから荷物預かり OK という返事が来たが、ウシュマルに関しては最後まで返事がなく困っていた。これも直接ウシュマル遺跡宛て問い合わせメールをしたところ、入場の際の預かり OK という返事があり、安心して出発した経緯がある。

ウシュマルではイグアナの多さが際立っている。また、ウシュマル周辺には規模は小さいながらも数多くの遺跡があり、遺跡好きにとって格好の場所である。私はここで大失敗することになる。それは、このままここにもう 2~3 時間滞在しタクシーをチャーターして各遺跡を巡れば良かったものを、ガイドブックを信じて残る 2 日間の間に見学する計画を組んでいた。メリダへ着いて直ぐにその遺跡見学ツアーを申し込んだが、ウイークエンドのみの催行であると云われて超ガックリ。『〇〇の歩き方』を信じた私が悪かった。その本には土日の文字は一切ない。残念だ！無念だ！

フランス人夫婦との出会い

ウシュマル遺跡の見学も無事終了し、早速レストランへ行ってランチを取り、コーヒーを飲み、土産品コーナーで銀製のピアスの気に入ったものがあるので購入し、挙句の果てアイスクリームまで奮発してルンルン気分である。

いよいよメリダ行きのバスの時刻になり、荷物を引き取りバス停に向かう。バス停には既に 10 余名の外国人がたむろしている。全員メリダへ行くとのこと。その中でフランス人の二人連れ(夫婦)に出会い、色々話すことになりバスの中でも話し込む。彼らは長い休暇を利用してメキシコへ来たという。私は 2010 年から体力のある内にと長い旅を心がけ、同年 7 月にイタリア・スイス・ドイツの 1 カ月旅行、その中でもドイツのオーバーアマガウと云う小村での 10 年に一度開催の Passion Play 2010 を見る目的で訪問したこと、11 年 3~4 月に英国周遊 1 カ月、11~12 月にインド周遊 1 カ月、そして 12 年 3~4 月のメキシコ周遊と続き、来年か再来年にはフランス周遊を計画し、45 日位の予定でコースもほぼ決めており最後はストラスブルだと云うと、彼等が云うには自分たちはストラスブルから来たと云うので、お互いに顔を見ながらびっくり。

私は続けて 1998 年 5~6 月のワールドサッカーの時期にパリに約 1 カ月滞在する幸運に恵まれ、パリや郊外に関してはかなり知っているが、その他のエリアはほとんど知らないのでは是非行きたいと思っていると私の凡その日程を話すと、フランス人でも各地の都市名等を知らないのにどうして地名を知っているのか聞かれ、何回もガイドブックを見ていれば記憶に残るものだと互いに笑い合う。逆に彼等からどうして一人旅なのか聞かれ、私は現在 96 歳になる母を妻と一緒に世話

しており、今は元気なためこうして海外にも行けるが妻と同時に行くことは出来ないこと、2012 年の予定として先ず私がメキシコ旅行を、妻は 7 月に姉妹で 3 週間のベルギー・オランダ・デンマーク・ノルウェー・スウェーデン・フィンランド旅行に出かけることになっていると話すと言ってくれた。

話題を変えて、所で貴国の大統領の選挙はどちらが有利か、サルコジ氏又はホランド氏？と質問するが、これに関してはノーコメントを通した 2 人である。このように話が弾みながらチチェン・イツァー遺跡には何時行くのかと聞くと、明日か明後日だと云うので、私は明日だと云ってその話は終わり。バスの約 2 時間半はあっという間に過ぎ、メリダに到着する。お互いの旅の無事を祈りながらフランス人夫婦と別れる。

メリダ

メリダ到着後、直ちにローカルブスターミナルの ATS 社のチケットカウンターに行き、Tour a La Ruta Puuc パスを購入したいと云うと、何時だと云われ、明日でも明後日でもいいと答えると、セニョール、その日のパスはないと云うではないか。何時のパスはあるのか聞くと、土日のみであると云う。もうガックリ。販売元のバス会社が云うので間違いはない。ここで押し問答をしても始まらないので、とにかくホテルへチェックインしてから、ツアーを行っている会社があるかも知れないと淡い期待を持って、ツーリスト・インフォメーションに行き小旅行を行っているツアーはないか聞いてみるが、やはり土日のみだと云う。再度ガックリ。憎っくき『〇〇の歩き方』、帰国したら〇〇するぞ等と思ってもみたが後の祭り。それにしても確かめておく必要があったなあと思息。一寸しつこいかな。ガックリはしてもチチェン・イツァー遺跡もあると気を取り直し、夕食を豪華にでもと思う。

ホテルへ戻りやり残していたシティマップを見ながらの主要見学地のマークを済ませて、ホテルの位置関係を確認すると、カテドラルを始めほぼ全て徒歩で歩ける距離ではないか。ブスターミナルもとても近い。ロケーションはバッチリで云うことなし。ただ、ホテル前の広場には鳩が超がつくほどたむろしており、「落ちフン」にも注意しなければならない。

実は別の情報でメリダには中華街があると聞いているので、ホテルのフロントでそのことを尋ねると、徒歩 5 分程度だと云うので先ずそこへ行って見る。ところが中華街全体が大規模なリノベーション(改修工事)を行っており、閉館状態でアウト。やむなく近くのレストランに入り、メキシコに来て初めての熱いオニオングラタンスープ、フレンチフライとカツフライ(豚肉)を注文する。ウェーターはてきぱきと機敏に動き回り、なかなかのサービス振りである。最後にコーヒーも飲み終わり、満足。ところが支払いの段階で、手書きのビルを見ると食事代 120 ペソでサービス料が 25 ペソとなっている。これまでメキシコのレストランでサービス料が含まれているのは初めてで、しかも 2 割以上となっている。1 割なら何も云わなかったと思うが、2 割では一言云わなければこの後の邦人も同じような目に遭うかもしれないと思い、ビルの内容を聞く。流石にクレームをつけられるとは思ってもいなかったらしい。直ぐにこれは書き間違いだと訂正し、120 ペ

ソプラス 12 ペソの計 132 ペソ(約 900 円弱)とビルを書き直し、その額を支払う。小うるさい日本人ここにあり。ホテルに戻るが、結構メリダは気温及び湿度が高く感じられクーラーを使って部屋を冷やしてから、止めて就寝する。明日は待望のチチェン・イツァー遺跡見学だ。今年の 12 月はマヤ歴で終末の年と云われており、多くの観光客が訪問すると耳にしている。

チチェン・イツァー

4 月 24 日(火)：メリダからチチェン・イツァー遺跡まで車で 2 時間を要し、メリダからのバス頻度が少ないので、事前に午前 6 時半発のバスチケットを購入済みである。またホテルのフロントもタクシー予約の必要は一切なく 6 時前にタクシーに乗れば十分と云うので、早朝ホテルを出ると広場のタクシー乗り場にタクシーが数台待機している。してやったりとタクシーでターミナルへ向かう。実は徒歩で行こうと一旦は思ったが、暗がりの道はやはり避けた方がいいとの判断でタクシーに乗る。10 分もかからずにターミナルへ到着。やはり遺跡行きの外国人がかなり待機している。

発時間になり早速乗り込み出発。高速道路であるが見ていると結構面白いことに気がつく。先ず行き先の道路標識が分かり易く、この道路はカンクンとも結んでおり所々に飲料水の標識、緊急電話のマーク、はたまた石油タンクローリーの標識が(どうもこれはガス欠の際利用できるらしい)、それと間違っただけで道路を降りた場合の迂回路がかなり多く用意されている等とても興味深い。多少の休息を取りながら 2 時間はあっという間に過ぎ、チチェン・イツァーに到着。指定のパーキングで止まり、ドライバーは帰りのバスもこの場所であると説明する。早速、遺跡の入口へ急ぐが、何と想像以上の見学者の多さに驚く。何と 50m 位のラインが出来ている。整然と並んで順番を待つがほとんどが外国人である。意外と早くラインは進み、一安心。やがてチケットを購入しゲートをくぐる。ついにチチェン・イツァーに来たぞ。

遺跡までのアプローチを進むと、広々とした空間と壮大なピラミデが目飛び込んで来る。チチェン・イツァーという言葉は、ガイドブック等によると“泉のほとり”の“イツァー人”と書いてあるが、チは口を、チェンは泉や井戸を意味し、イツァーはイツァーの人/民を表すとのこと。イツァー人の住むこの地にはユカタン半島最大のセノーテ(聖なる泉)があり、ここを中心として都市が形成され発展したと考えられている。古くは紀元 6 世紀のマヤ古典期の文化を持ち、10 世紀以降はトルテカ文化と融合したマヤ後古典期の文化を持ち合わせている。当遺跡のエリアも明確に分かれ、東西を通る道を境に南側が旧遺跡群(カラコル、高僧の墳墓、尼僧院など)、北側が新遺跡群(ククルカン神殿、ジャガー神殿、球戯場、セノーテなど)となっている。しかも、同じ民族が遷都を繰り返して再び戻って来ている。旧遺跡群を造ったこの民族は、一度この都市を離れ、10 世紀になり再びこの地に戻って新遺跡群を造った訳である。繁栄と栄華を誇ったイツァー人は 13 世紀初めマヤパン族により滅亡する。

ここでメキシコ各地の遺跡群やチチェン・イツァーの遺跡群を見学しての感想を記す。今日の私達の考え方や価値観から云えば到底受け入れられるものではないが、

古代における中南米のマヤ・アステカ、その他多くの部族にとっての死生観は、強いジャガーや蛇は神の力を持つ存在であり、雷、嵐、洪水、大雨、津波、地震、山火事、日照り、虹や太陽、月、星、流れ星、日食、月食或いは疾病、人間の生命の誕生と死の神秘等は、到底人間の力の及ぶところではなく、畏怖・畏敬の概念が生まれたのは必然である。従って、人間技を超える現象や天変地異等に対処するには自ら犠牲を払うしか方法がないと考えたとしても、何の不思議はない。メキシコの遺跡群の中の生贄、骸骨、斬首、血が滴る心臓等のレリーフやその解説等を見聞き、“むごたらしい”“残酷だ”と思ったり言葉に出したりするのは簡単であるが、それで済ましてはならないと私は思う。その背景を探ることこそ重要である。



待望のチチェン・イツァー遺跡の見学は終了し興奮未だ冷めやらずであるが、何時までも当地に留まるわけにもゆかず、ランチを取るためゲート内のレストランに向かう。ここでも妙な市場原理を経験する。実は施設内レストランが 1 軒あり、その他ファーストフード店が 2 軒ある。レストランに入ってメニューを見ると、とてつもなく高額。シティの 5 星ホテルのレストランの価格と変わらない。従ってランチタイムにも関わらずゲストの数はひとけたのバラバラ。そう云えば、レストランの店員が呼び込みをしているのでおかしいなと思っていたが……。一方ファーストフードの店はほぼ満杯。メニューを見るとレストランより断然安い。私もそこへ入ろうかと思いつきながら並んでいると、若いセニョールがお弁当があるよと云うではないか。簡単に云えばサンドイッチのようなものであったが、飲み物付きで〇〇ペソ。立って食べるのは苦手なため何処か座って食べるところはあるのか聞くと、直ぐ外のお土産店に行けばあると云う。何のことはない、彼らはゲート外のお土産店の人で、ゲート内の食事が高いためバジェットランチを用意していると云う訳。結論は、そのランチを食べ且つお土産も少し購入と相成りました。それにしてもあのレストラン、あそこまで高くする必要はあるのかと今でも思っている。今日も客引きをしているのかな。



名残は惜しいが、いよいよ当地ともお別れの時間だ。午後 2 時 20 分発のバスでメリダに戻るため、パーキングへ向かう。やはり 10 数人の人がバス待ちをしている。ほぼ時刻通りバスは到着しメリダへ向かう。車内で少し休息を取ろう。

メリダ

バスは定刻メリダのターミナルに到着。午後 4 時半頃である。ここからは是非行きたい場所がある。それはメルカド(市場)の見学。バナナの購入やマンゴ等のご馳走になろうかという意図もある。ターミナルの関係者に地図を広げて凡そのルートを教えてもらうが、凡そ徒歩 15 分程度だと云う。メルカドへゴー。途中、一度方向を確かめるため通行人に聞いてみるが、大丈夫この道を行けばメルカドだ。段々人通りも多くなり間違いなく近づいている。到着。やはり、メルカドでの人々のエネルギーは凄いとを感じる。早速バナナを購入し、カウンターバーの店でマンゴジュースを注文し、一気に飲む。とてつもなく美味しい。ここでも感じたが、何もかも清潔さが保たれている。

メルカドからソカロまでは徒歩 15 分くらいで、出発進行。道順を聞くと間違いなくカテドラルとソカロの間の道路に出るはずだ。歩きも軽快なステップ。人通りもメルカド地区と変わらないではないか。だんだんもっと多くなる。この道路はショッピング地区だ。その内、右手にカテドラルが見えて来る。やったね。思った通りの場所へ到着だ。早速、カテドラルとソカロ広場を見学する。カテドラルはユカタン半島最大で、今まで見て来たカテドラルは豪華絢爛な感じであるが、このカテドラルは装飾等の華やかさは一切なく重厚な



感じがする。また、ユカタン半島の征服者モンテホが富に任せて 1549 年に建てた大豪邸を見学。今日 1 日の行程はほぼここで終わり、明日は博物館巡りの予定を組んでいる。

4 月 25 日(水) : 朝食後、ホテル傍のヘスス教会を見学。当教会もカテドラルと同様、地味な建造物で朝のお祈りをする人が多い。その後

メリダ州立案内所へ行き、今回やむなく諦めたカバー、サイル、シュラパック、ラブナ遺跡の資料やカラクムル遺跡を含むユカタン半島全般の遺跡関連資料を収集し、係員にこれから見学するユカタン半島人類学博物館の情報を聞くと、凡そ徒歩 15 分で行くことが可能とのこと。以前は州知事公邸であった建物を改装した立派な博物館で、メキシコに来て初めて展示品全てが英語で解説されていることに驚いた。展示品は全てオリジナルで、係員が傍におり気軽に質問をしながら見学することが出来るのも嬉しい。見学を終える頃、多くの女学生の一団が見学研修のため入場。見学後、一旦宿泊ホテルへ戻る。ランチタイムになり散策を兼ねて

再度メルカドへ向かい、その近くで昼食を取り、食後には再度新鮮なマンゴを満喫する。写真撮影をしながら散策を続け、ホテルへ戻る。今日はゆっくりと休養し、今晚の夕食はホテルで取ろうと決め込んで、久々にお昼寝をする。

カンクン

4 月 26 日(木) : ブスターミナルへはタクシーで行き、早朝 7 時発のバスで最後の訪問地カンクンへ向かう。乗客はかなり多く満席である。座席は横三列スタイルの 1 人席でとてもリラックス出来、快適な 4 時間 30 分の走行。お昼少し前にカンクンブスターミナルに到着。メリダの宿泊ホテルで系列のホテルがブスターミナルの前にあるという情報を得ているので早速訪問し、市内地図の入手や自分の宿泊ホテルへの行き方等質問した上で、レストランで昼食を取る。お腹も空いておりとても美味しく頂く。フロント及びレストランの係員の対応がとても親切で、流石にカンクンは違うなという感じがする。しかも情報は的確で、循環バスの運行は山手線並みである。大きく手を挙げてバスをつかまえて乗り込む。ドライバーに宿泊ホテルを提示すると OK の合図。大きな荷物を持ち込むが、乗客の皆さんも手なれたもの、ウエルカムという様子に安心し、これで一件落着。

ブスターミナルからカンクンビーチリゾートの端まで 20km 以上あり、一回りすれば山手線一周よりはるかに大規模だ。バスは左手にカリブ海を、右手に内海(潟)やゴルフ場を見ながら、かなりのスピードで快適に走行する。有名ホテルの一群やレストラン、土産品店、アミューズメント施設等を通り過ぎながら、ドライバーは次だよと合図するが、凡そ 15 分経過している。宿泊ホテルに無事到着。チェックインは午後 1 時半過ぎであるが、フロントスタッフより腕にプレスレットを巻かれ、これは全食事込み(フルペンション)の印で、チェックアウトまで絶対に外さないようにとの指示を受け、その上ランチを召し上がりますかと尋ねられる。当方はランチを済ましたばかりだと答えると、ビュッフェランチが用意されているのでお飲み物だけでも召し上がれと云われる。何のことはない、当ホテルの宿泊条件は毎朝食込と思い込んでいたが、フルペンションという条件である。ここでも嬉しい誤算!! 間違いなくコンファメーション・スリッパは朝食込となっているが……。思い直しながら部屋へ行くと部屋の広さにびっくり、40 m²はあるかと思うほどの贅沢な造りであり、20 代の中頃、初めてハワイへ行った際の宿泊のリーフホテル(現アウトリガーリーフホテル)を懐かしく思い起こす。

早速、水着に着替え、プレスレットを見せてバスタオルを借りると共に、係のセニョリータに背中に日焼け止めクリームを塗布を依頼して、プールやプールサイドにあるバーや 2 つのレストラン等を見学しながらビーチサイドへ行く。かなり多くの宿泊客がプールやビーチサイドで日光浴を楽しんでいる。目の前は真っ青で綺麗なカリブ海、左方向を見ると大きなホテルとビーチパラソル、レジャーボートやパラセーリングの気球が高く舞い上がっている。右方向を見ても同様な光景である。それが左右一直線に連なっているではないか。その雄大なスケールに息を飲むばかり。今までビ

ーチリゾートを、ハワイの島々、グアム、サイパン、バリ島、フィジー島、フィリピンのマクタン島、パタヤ、プーケット島、ペナン島、マレー半島東海岸、インド洋東海岸、スペインのコスタ・デル・ソル等を訪問したことを思い出しながら、今までの訪問が色あせる程カルチャーショックを受けてしまった。やはり世界は広く凄いなと思う。これだから旅はやめられない。

しばしサンデッキに横になりながら感慨にふけていると、後方で大きな話し声と歓声があるのでホテル方向に振り向くと、上層階に手書きの大きな垂れ幕が風になびいている。しかもその垂れ幕に「NORIA」と書いてあるではないか。私の名前は「NORIAKI」である。話し声のグループは10数人の若い男女の青少年で歓声を上げながらビーチバレーを始めて、しきりに私に参加しないかと云って近寄って来る。私は激しい動きにはついていけないから、観戦させてもらうよと云いながら、その若者達と話をすることになった。私は日本から来たこと、名前はNORIAKIであると云うと、彼らはNORIAのグループで、カンペチェ州からヴァケーションで来ていると云う、しかも私の名前とグループの名前がとても良く似ており2日間に亘り食事時やビーチでの会話が弾むことになる。彼らは専門学校で学んでいる印刷広告業職人のたまご達であった。私は1カ月間に亘るメキシコ旅行での様々なメキシコの印象を語るが、彼らは日本は遠くて余り良く知らないがとても豊かな国であると聞いていると話してくれる。私はその豊かという意味の幻想について少しばかり話を付け加えたのは云うまでもない。

やはり日本はこの国にとってとても遠い存在の国であることが分かり、もっともっと、日本の存在を世界に発信し知らせる事の重要性を再認識した次第である。こうして夕方7時過ぎまでビーチサイドで時間を過ごし、かなり日焼けをしてしまうが快い日焼けである。日没の光景はまた格別で、これも長く記憶に残ろう。出来れば明日の朝日に立ち会えるならばと思ひながら、部屋に戻る。

シャワーを浴びてから夕食ビュッフェに向かう。NORIAのグループはバーカウンターでアルコールを飲んでいる。私が近づくと、へいNORIAKIと大きな声で呼びかけて来る。彼等は今もう既にアルコール類を飲んで氣勢を上げている。尚、アルコール類は有料だが清涼飲料はコンプリメンタリーである。私は挨拶をしてからレストランに向かい、座ろうとするがほとんど空席が見つからない。こんなに大勢の宿泊客がいるとはと驚く。何とか合い席に座ってWhere from?と聞くと、Ukraineと答えてくれる。彼女らはロシア人の女性グループで、ヴァケーションでスペインからメキシコに来たと云うが、ウシュマル、メリダ、チチェン・イツァーそしてカンクンでも多くのロシア人に出会っている。食事メニューは肉魚料理、スープ類、パン・ライス、炒め物数種、サラダ、フルーツ類、ケーキ類、ジュース類、コーヒー・紅茶等がそれなりに揃っており、夕食には十分なメニューである。こうして、カンクンビーチでの初日を終えるが、今回のメキシコ旅行の充実した思い出が余りにも多く、なかなか興奮が止まず寝つかれない。明日はトゥルム遺跡の見学だ。

トゥルム

4月27日(金): 残念ながら朝日の観賞は出来なかったが、朝食はゆっくりと取り、朝のビーチを散歩する余裕に恵まれる。ビーチサイドでは一心不乱に清掃に励む人達があり、波打ち際に打ち上げられた藻くず等をかき集めている姿に、ここでもメキシコのクリーンさを確認し朝からすがすがしい気持ちになる。朝食は例のNORIAグループと一緒に、私のトゥルム行きスケジュールを云うと、彼らはこの後チェックアウトしてカンペチェ州の街に帰ると云う。お互いの健勝を祈りつつ、別れの言葉をかけあう。

午前9時過ぎのトゥルム行きのバスに乗るため、例の山手線循環バス?に乗りブスターミナルへ向かうが、かなりの乗客数である。何の支障もなくターミナルに到着し、予定通りトゥルムへ出発。出発して間もなく、左手側はカリブ海であるが大きなビーチリゾートを持つハイアットホテル並みのビーチリゾートホテルやマヤの小遺跡群があることに気づく。帰国後メキシコ旅行関係者にその話をしたところ、やはり当初のカンクンビーチから一步離れた場所にターゲットを決めて豪華なビーチリゾートホテルを何年か前から建て始めたとのことである。そのような場所を通り過ぎながら、約2時間半でトゥルムへ到着。流石にカンクンビーチ周辺の外国人滞在客が多いことを伺わせるように、既にパーキングも人出もかなりの混雑を見せている。ドライバーに帰り便の確認をすると、今止まった場所からバスが出発すると云うので一安心。少しランチ時間には早いけれど、この後の行動(トゥルム遺跡見学及び遺跡内海岸での水遊び)を考慮して、お腹を満たすためレストランに入りコークとポテトフライ等をオーダーし、食後、遺跡見学に向かう。しかし各遺跡の入場見学は禁止されている。残念だが仕方ない。

午後2時のバスでカンクンに戻り、早速ブスターミナルから山手線循環バスに乗り、既に目をつけていたプラヤ・ランゴスタ港に停泊中のキャプテン・フック号を見に行く。全て海賊船風にデザインされ、午後19時出港し帰港時刻は22時半と云うことである。船内の見学を交渉するが船内都合により叶わず、これも残念無念。今日2回目の挫折感を味わう。その後バスにてプラサ・カラコルへ向かい、プラヤ・カラコル棧橋を見学する。この近辺の海は内海のような感じになっており、遠浅も長く且つ波も比較的穏やかであるため人気がある地区だと聞いているので、是非立ち寄ってみたかったロケーションである。

プラサ・カラコルに戻り、バス道路に出ようかとしたその鼻先に「花いち」という日本レストランの看板が目飛び込んで来る。午後5時過ぎで日も高いが、夕食までの間の繋ぎのつもりでメキシコに来て初めて日本レストランへの入店を決める。1ヶ月ぶりの急須入り日本茶に感激すると同時に、米粒を食べようとアナゴ寿司のセットを注文する。お箸、お吸い物や漬物にも懐かしさを感じる。やはり日本人だということであらためて実感する。チェックの際、若い日本人マネージャーのセニョリータが来るので、お店のこと、お客様のこと、昨今のカンクン事情等を結構詳しく尋ねるが、一つ一つ丁寧に受け答えをして頂き有難かった。総じてカンクンを訪問する日本人は少ないと云うこと

である。ここを出るとバス通りの傍にメキシコ土産品店アウトレットがあるので、立ち寄ってみる。時期的なものかどうか不明だがお客数は極めて少なく、この状態で店の経営は大丈夫なのかと思わず考えてしまうほど閑散としている。

大分時刻も経過したので山手線循環バスに乗りホテルへ戻る。明日はいよいよメキシコ滞在の最終日だと思いがらの帰路である。明日の予定はエルレイ遺跡の見学、宿泊ホテル近辺の様子見とビーチでの水遊びに集中して最終日を終える予定だ。

最終日

4月28日(土)：早朝6時過ぎに起床し、真っ先にビーチへ行く。少し雲がかかっているが段々朝日がさし始めるような状況にある一方、砂浜には黙々と清掃作業を行う人が働いている。そこには朝日が昇る様子と清掃作業というアンバランスな光景を観ている傍観者が存在している。これも無限大に時を刻む超がつく微細な歴史のひとつのひこまのついでであろう。三々五々と人々が周囲に集まり始めている。朝食時間は7時からだがその前に朝日を観ようと集まって来ているのだ。時計は7時を過ぎたが未だ朝日は昇らないが、レストランが一杯になるような雰囲気。皆、急いでレストランのビーチサイド寄りの席を確保するのに向かう。こうして現実の世界に戻りながら朝食を食べることになる。

朝食後の予定は先ずエルレイ遺跡見学からスタートし、有名ビーチと有名ホテルのいくつかの見学を午前中に行い、午後から終日ビーチで過ごす予定である。エルレイ遺跡はホテルから僅か徒歩5分で到着。AD1200~1500頃の小さなマヤ遺跡であるが、遺跡隣接の宿泊客にとって散歩を兼ねての見学にとっても便利な遺跡で、ビーチリゾートと共存している遺跡である。メキシコ旅行で初めて当地で、日本ツアーの自由時間に遺跡を訪れたご夫妻と遭遇し、親しくお話をしカメラ撮影も一緒する。

ここを後にしてバスにて約5km先のザ・リッツ・カールトン・カンクンホテルのエリアに向かう。このエリアにはJWマリオット、ル・メリディアンホテル等の高級ホテルやローカルレストラン群があり、どのような光景か観たいので行ってみる。ホテルインスペクションも出来ない訳ではないが、名刺交換をしたり等面倒なこともあり、ホテルブローチャーをピックアップしてホテルロビー、コーヒーショップ、レストラン、プール及びビーチ等の様子を眺める。ローカルレストランはシーフードを中心にしたレストランが多い。総じてカンクンのホテルは、食事付が宿泊条件となっている。見学したホテルの宿泊客のほぼ全員が私と同様、色違いのブレスレットをしているので判別可能である。

約4kmほどバスでエルレイ遺跡寄りに戻るとイベロスター(元ヒルトンカンクン)ホテルがあり、その直ぐ右隣りがプラヤ・デルフィネスビーチだ。このビーチはパブリックビーチでもあり、多くのメキシコの人達もピクニック気分水遊びに来ている。豊富すぎるほどのきめ細かい砂浜が続き、ビーチには常に白波を立てた海水がローリングしながら打ち寄せており、ドルフィンビーチとも呼ばれているがその背景は不明である。サンデッキの貸し出しもあり、またモーターボートやパラセーリング等の設備も用意されているので

何時でも借りることが出来る。

滞在最後のホテル

ビーチ伝いに宿泊ホテルまで約1kmくらいの間、貝を拾いながら歩いて戻る。大きな貝はほとんど見つからないが、色とりどりの小さな貝を拾い集めて部屋に戻る。休む間もなく水着に着替え、日焼け止めを塗ってもらい且つビーチタオルを借りてビーチに向かう。サンデッキはほぼ占有されているが、多少ガタつきのあるデッキが未使用のまま置いてあるのでそれを利用して横になる。日本から唯一持参した本は読み終える予定にしていたが、やはり三分の一程度は読まずに帰ることになりそうである。部屋に戻るまで数回海に入るが、カリブ海は常に白波を立てながら打ち寄せ、波の最後はローリングしながらビーチ沿いに白い波しぶきを立てて上って来る。波の間隔はとても正確で、間断なく打ち寄せて来る。胸ぐらいまでつかう程度の水底に立って、波を迎える姿勢でいると最初の波は何か持ちこたえて立った姿勢を保てるが、次に来る波を迎える体制を整える間もなく波が押し寄せて来るので、あつという間もなく波をもろにかぶり、一瞬全身が海水の下に潜りこみ、何秒間かの水底スリルを味わうことになり、結局これを数回味わう。次回は波が穏やかなカンクン岬周辺のホテルに宿泊してみようと思う。水遊びの間、のどが渇くとバーではコーク等の清涼飲料が無料で用意されているなんて、こんなこと有り?? 事実事実は事実だ!! 何回かお世話になる。

こうして最終日のカリブ海での水遊びも終わろうとしている。無料レンタルのバスタオルを返却し、明日日本に帰ると云うとセニョリータがCome back again?というので、I hope so.と答えて部屋へ戻る。

シャワーを浴び水着等の洗濯も終えて、荷物のパッキングの準備を始めるが、時刻は既に午後7時を過ぎている。早めに夕食をと思いレストランに向かう。流石にウエイトレスやスタッフも私の顔を覚えていて、Welcome Sirと笑顔で出迎えてくれる。明日は早朝にチェックアウトして日本に帰国するので今晚の夕食で皆さまとお別れだというと、We remember you, please come back again, and we are waiting for you.と少しばかりセンチメンタルな言葉遣いになったので、Gracias señor and señorita, We Japan are long distant from your Mexico, but our friendship between you and I is close too much.と答えながら夕食を取る。夕食を終える頃、セニョリータの一人がCoffee or Tea?と云うのではないかと、思わずCoffee please.と答えてしまう。本来はセルフサービスなのに。夕食を終え荷物のパッキングも済まして、フロントへ行き明朝のタクシーの予約確認をして就寝。

実に旅は楽しく、人生の思い出が沢山出来、今回のメキシコ旅行は大満足し、このような旅を当分続けようと更に決心を固める。今後の旅行予定としてのフランス周遊、アドリア海方面(クロアチア・スロベニア)、スリランカ周遊、モロッコ周遊、ミャンマー周遊、ベトナム北部サパと中国棚田周遊、アメリカ国立公園周遊等残された時間内に行けるかどうか疑わしいが……。手前勝手ながら、旅程は計画済みで何時でも行ける状態になっているが、家内の協力の下で介護中の私の母(7月26日で96歳)の予測不能方程式の解が全てを

左右する鍵となっている。

帰国の途へ

4月29日(日)：予定通り早朝の予約タクシーでカンクン国際空港へ向かう。山手線循環バス道路は早朝のため空いており快適に走行しながらも、途中点滅パトカーが止まっている場所では極端にスピードを落として走る。どうしてかと聞くと、指定場所以外でのユーターンをする車を見張っているのだという。色々なことがあるものだと思いますうちに空港に近づく。ドライバーは **Senor, Domes or Inter?** と聞くので **Inter.** と答えると **Sí, Senor** と答える。こうして、メキシコ最後のデスティネーションであるカンクン国際空港に到着。早朝にも関わらず、空港は混雑している。

07:55分発デルタ航空530便のアトランタ行きのチェックインカウンターも同様に長い列を作っている。受付カウンターは5~6カ所ありスムーズに手続きは流れ、以外にも余り待ったという意識がないほどの時間で手続きを終える。成田行きのボーディングパスも事前に指定した席になっており、もう安心だ。早めに出国検査等を終えて空港内施設を見ようと歩き出す。何の問題もなく通り過ぎ、国際線のデューティフリーエリアに到着。多少のお土産品と家内や娘からの依頼品(化粧品)を先ず優先的に買う。購入の後、残っているテレカで自宅に電話を入れると(現地時間07時=日本時間21時)、家内からもう帰ってくるの?という第一声。依頼品は買ったよと話す予算内?と云う。当方はほぼ予算内だと答えるともう一個買うように指示され、急いでお店に戻り購入。再度電話すると、メキシコの通貨は両替しないで残しておくよう厳命?が下る。魂胆は見え見え、近いうちに訪問する計画であろう。今回のメキシコ旅行の報告で行く気になってくれたのがチョッピリ嬉しかった。

定刻通り航空機はアトランタに向けて出発し、予定時刻の11時半頃到着。アトランタで入国審査及び乗換検査があるが、特に入国審査の際に目の色及び指紋の検査があり、また乗換手続きの際もベルトや靴も全て検査対象となる。テロ等の対策のためでもあり、厳しい検査があるほど安全が増すと考えれば検査に協力すべきである。検査終了後、乗換便ターミナルへ行き出発便ゲートを確認する。帰国便の出発まで約2時間の猶予があり、この後はランチタイムと決めてファーストフードのマックでランチを取ることにする。コーク、マックにポテトフライのセットがあり早速オーダーする。お腹が空いていたせいもあり一気に食べてしまい、タププリ待ち時間もあるので追加でアイスクリームまでオーダーしてしまった。ファーストフードの店に長く留まる訳にもいかず、ターミナル内を散策することにする。トイレを済ましたり、店舗を覗いたり、別のゲートの空いている長椅子に座って時間を費やす。そうこうしている内に搭乗時刻も近づいて来たので当該ゲートへ行くと、かなりの乗客数である。既にハイグレードクラスやインファント連れの搭乗が始まり、エコノミーの搭乗は座席番号の大きい数字(後方座席)の乗客から搭乗を開始する旨のアナウンスを繰り返しているため、ラインも出来つつある。

アメリカ人の若夫婦と

私の座席は36Cである。大した時間もかからずに搭

乗することが出来たが、座席のことで結果的にこの席をお譲りして、私は36Dに座ることになる。その訳はアメリカ人の比較的若い夫婦の座席が36Bと36Dとに分かれていたからである。満席のせいでこうなることも致し方ないが、私の方から申し出て座席を代わる。これがきっかけで彼らともお話をすることになる。彼らは成田で乗り継いでバンコクへ行くそうである。約一ヶ月の旅程で、メインはクラビー島に滞在したいとのこと。クラビー島はプーケット島に比較的近いが、首都バンコクから航空機で1時間半程度かかる位置にある。私が何故クラビー島を選んだのか聞くと、出来るだけ都会の喧騒を離れ且つ人里を離れた場所でのんびりと過ごしたいと云う。クラビー島は確かにプーケット島よりはカントリーサイドであると思うと感想を述べる。彼らはまた絶対に訪問した方がいい場所があれば教えて欲しいと云うので、私はバンコクのワット・プラケオ、ワット・ポーやワット・アルン、黄金仏寺院や世界遺産アユタヤ遺跡及びスコタイ遺跡等は、折角タイを訪問して見ないで帰ることはないと強調すると、彼等は早速ガイドブックを持ち出して2人で検討をし始める。

私は帰国便ではハリウッド古典映画の「ベン・ハー」と「アラビアのロレンス」の2本は必ず見ようと思っているので、何かあったらお話し下さいと断りを入れて映画観賞に没頭する。最初はベン・ハーからであるが、お手洗いにいくのも忘れるほど映画に没頭する。インターミッションの後、主人公が「**Strange destiny** (数奇な運命)により何度も命を救われた」というシーンが何度見ても好きで、今でも鮮明に覚えている。数多い部門のアカデミー賞受賞作品である。途中何度か機内放送による中断があるが、めげず見逃さないように夢中になり、まるで子供に戻ったような態様である。私は本年で4年目になるが、旧約聖書の講義を受けている。講義はモーゼ五書から始まり現在預言書の後半に入っているが、本年度の講義を出来るだけ受けるようにして一神教の世界のほんの一端でも理解できればとあらためて思い直す。機内では日本到着後のドキュメント類の配布、食事、免税品販売等が続くが映画観賞は止まらない。お隣のアメリカンも多分気を使っているのだろう、今のところ特に話しかけはない。その内に第一部ベン・ハーは終了。早速トイレに立つとアメリカンも同時に用をたす。座席で待っているとアメリカンも戻って来る。**Can I help your Thai tour?** と問うと、**Now we have not, but later.** と云うので、**We have more time, if you have any, please talk with me.** と答えて、再び映画観賞に戻る。

映画鑑賞後、機内を歩き回って気分を紛らわし、座席に戻り短時間眠りに着く。その内、アナウンスに起こされて朝食の時間となりジュース、オムレツ等を食する。隣のアメリカンも眠そうな顔であるが完食している。しばらくして成田東京国際空港到着。アメリカンとも **You have a nice trip, good bye!** と云って機内を後にした。到着口のターンテーブルで荷物を待つ間に自宅へ電話を入れ無事に着いたよと云うと、家内の第一声は“もう帰って来たの?”である。いよいよ現実の世界だ。再び、日常の世界へ戻った。次の非現実・非日常世界への機会を待とう。The End (29.12.2012 記)